

1月24日に日本野球規則委員会より、2017年度の野球規則改正が発表されました。

今回の規則改正では、「野手が捕球後、ボールデッドの箇所に踏み込んだ場合にも、ボールデッドになり、塁上の走者には1個の安全進塁権が与えられる」と変更されます。また、プレーヤーの安全を守り怪我を未然に防ぐためのルールとして、「併殺を試みる塁へのスライディング」に関する項が新たに追加されるなどの改正が行われています。

新設される項目では、正しいスライディングを「滑り込んだ後もベース上に残ろうとする」「野手との接触を目的に経路を変更しない」などと定め、これに反して、併殺阻止のために手を上げたり意図的に野手に接触したりするなどした場合は、走者だけでなく打者走者もアウトが宣告されることとなります。悪質なプレイは警告の対象となりますが、アマチュアでは2013年から内規で同様の規則を実施しています。

発表された内容は以下のとおりで、赤く表示した部分が改正された内容です。

現 行	改 正 後
<p>3.05 『一塁手のグラブ』</p> <p>一塁手の皮製グラブまたはミットの重量には制限がない。その大きさは、縦が先端から下端まで12インチ(30.5センチ)以下、親指の叉状の部分からミットの外縁まで測った手のひらの幅が8インチ(20.35センチ)以下、ミットの親指の部分と人差し指の部分との間隔は、ミットの先端まで4インチ(10.2センチ)以下、親指の叉状の部分で<math>3\frac{1}{2}</math>インチ(8.9センチ)以下でなければならない。この感覚は一定に保ち、皮以外のものを用いたり、特殊な方法で間隔を大きくしたり、伸ばしたり広げたり、深くすることは許されない。</p> <p>親指と人差し指との間にあるウェブは、その先端から親指の叉状の部分まで長さが5インチ(12.7センチ)以下になるように作る。ウェブはひもで編んだものでも、皮革で被覆したひもで編んだものでも、または手のひらの部分の延長となるような皮革をひもでミットに結び付けたものでもよいが、前記の寸法を超えてはならない。しかし、ウェブのひもに皮以外のものを巻き付けたり、ひもを皮以外のもので包んだり、又はウェブを深くしてわな(トラップ)のようなあみ形にすることは許されない。</p> <p>「注」我が国では、縦の大きさを先端から下端まで13インチ(33.0センチ)以下とする。</p>	<p>3.05 『一塁手のグラブ』</p> <p>一塁手の皮製グラブまたはミットの重量には制限がない。その大きさは、縦が先端から下端まで<b>13インチ(33.0センチ)</b>以下、親指の叉状の部分からミットの外縁まで測った手のひらの幅が8インチ(20.35センチ)以下、ミットの親指の部分と人差し指の部分との間隔は、ミットの先端まで4インチ(10.2センチ)以下、親指の叉状の部分で<math>3\frac{1}{2}</math>インチ(8.9センチ)以下でなければならない。この感覚は一定に保ち、皮以外のものを用いたり、特殊な方法で間隔を大きくしたり、伸ばしたり広げたり、深くすることは許されない。</p> <p>親指と人差し指との間にあるウェブは、その先端から親指の叉状の部分まで長さが5インチ(12.7センチ)以下になるように作る。ウェブはひもで編んだものでも、皮革で被覆したひもで編んだものでも、または手のひらの部分の延長となるような皮革をひもでミットに結び付けたものでもよいが、前記の寸法を超えてはならない。しかし、ウェブのひもに皮以外のものを巻き付けたり、ひもを皮以外のもので包んだり、又はウェブを深くしてわな(トラップ)のようなあみ形にすることは許されない。</p> <p><b>【注】を削除する。</b></p>
<p>3.06 『野手のグラブ』</p> <p>捕手以外の野手の皮製グラブの重量には制限がない。グラブの寸法を測るには、計量具または巻尺をグラブの前面またはボールをつかむ側に接触させ、外形をたどるようにする。その大きさは、縦が4本の指の各先端から、ボールが入る個所を通過してグラブの下端まで12インチ(30.5センチ)以下、手のひらの幅は、人差し指の下端の内側の縫い目から、各指の下端を通過して小指外側の縁まで<math>7\frac{3}{4}</math>インチ(19.7センチ)以下である。</p> <p>親指と人差し指との間、いわゆる叉状の部分(ク</p>	<p>3.06 『野手のグラブ』</p> <p>捕手以外の野手の皮製グラブの重量には制限がない。グラブの寸法を測るには、計量具または巻尺をグラブの前面またはボールをつかむ側に接触させ、外形をたどるようにする。その大きさは、縦が4本の指の各先端から、ボールが入る個所を通過してグラブの下端まで<b>13インチ(33.0センチ)</b>以下、手のひらの幅は、人差し指の下端の内側の縫い目から、各指の下端を通過して小指外側の縁まで<math>7\frac{3}{4}</math>インチ(19.7センチ)以下である。</p> <p>親指と人差し指との間、いわゆる叉状の部分(ク</p>

<p>ロッチ)に皮のウェブまたは壁形の皮製品を取り付けてもよい。ウェブはクロッチをぴったりふさぐように2枚の普通の皮を重ね合わせて作っても、トンネル形の皮や長方形の皮をつなぎ合わせて作っても、または皮ひもを編んだもので作ってもよいが、わな(トラップ)のようなあみ形にするために皮以外のものを巻き付けたり皮以外のもので包むことは許されない。ウェブがクロッチをきっちりふさいだとき、ウェブは柔軟性があっても差し支えない。数個の部品をつなぎ合わせてウェブを作るにあたって、それぞれをぴったりとくっつけなければならない。しかし、部品を湾曲させてくぼみを大きくさせてはならない。ウェブはクロッチの大きさを常に制御できるように作らなければならない。</p> <p>クロッチの大きさは、その先端の幅が<math>4\frac{1}{2}</math>インチ(11.4センチ)以下、深さが<math>5\frac{3}{4}</math>インチ(14.6センチ)以下、下端の幅が<math>3\frac{1}{2}</math>インチ(8.9センチ)以下である。ウェブはクロッチの上下左右度の部分にでも、きっちりと取り付けられていなければならない。皮のしめひもで結び付けられたものは、しっかりとつなぎ合わされ、伸びたりゆるんだりしたときには、正常の状態に戻さなければならない。</p> <p>「注」我が国では、縦の大きさを先端から下端まで13インチ(33.0センチ)以下とする。</p>	<p>ロッチ)に皮のウェブまたは壁形の皮製品を取り付けてもよい。ウェブはクロッチをぴったりふさぐように2枚の普通の皮を重ね合わせて作っても、トンネル形の皮や長方形の皮をつなぎ合わせて作っても、または皮ひもを編んだもので作ってもよいが、わな(トラップ)のようなあみ形にするために皮以外のものを巻き付けたり皮以外のもので包むことは許されない。ウェブがクロッチをきっちりふさいだとき、ウェブは柔軟性があっても差し支えない。数個の部品をつなぎ合わせてウェブを作るにあたって、それぞれをぴったりとくっつけなければならない。しかし、部品を湾曲させてくぼみを大きくさせてはならない。ウェブはクロッチの大きさを常に制御できるように作らなければならない。</p> <p>クロッチの大きさは、その先端の幅が<math>4\frac{1}{2}</math>インチ(11.4センチ)以下、深さが<math>5\frac{3}{4}</math>インチ(14.6センチ)以下、下端の幅が<math>3\frac{1}{2}</math>インチ(8.9センチ)以下である。ウェブはクロッチの上下左右度の部分にでも、きっちりと取り付けられていなければならない。皮のしめひもで結び付けられたものは、しっかりとつなぎ合わされ、伸びたりゆるんだりしたときには、正常の状態に戻さなければならない。</p> <p>【注】を削除する。</p>
<p>3.07 『投手のグラブ』</p> <p>(a) 投手用のグラブは縫い目、しめひも、網を含む全体が1色であることが必要で、しかもその色は、白色、灰色以外のものでなければならない。</p> <p>守備位置に関係なく、野手はPANTONEの色基準14番よりうすい色のグラブを使用することはできない。</p> <p>「注」アマチュア野球では、所属する連盟、協会の規定に従う。</p>	<p>3.07 『投手のグラブ』</p> <p>(a) 投手のグラブは、縁取りを除き白色、灰色以外のものでなければならない。審判員の判断によるが、どんな方法であっても幻惑させるものであってはならない。</p> <p>守備位置に関係なく、野手はPANTONEの色基準14番より薄い色のグラブを使用することはできない。</p> <p>「注」アマチュア野球では、投手のグラブについては、縁取り、しめひも、縫い糸を除くグラブ本体(捕球面、背面、網)は1色でなければならない。</p>
<p>【3.03~3.09 原注】</p> <p>審判員は各項に対する規則違反を認めた場合には、これを是正するように命ずる。審判員の判断で、適宜な時間がたっても是正されない場合には、違反者を試合から除くことができる。</p>	<p>【3.08 原注】</p> <p>審判員は各項に対する規則違反を認めた場合には、これを是正するように命ずる。審判員の判断で、適宜な時間がたっても是正されない場合には、違反者を試合から除くことができる。</p>
<p>5.04 『打者』</p> <p>(b) 打者の義務</p> <p>(4) バッターズボックスルール</p> <p>(A) 打者は打撃姿勢をとった後は、次の場合を除き、少なくとも一方の足をバッターズボックス内に置いていなければならない。この場合は、打者はバッターズボックスを離れてもよいが、“ホームプレートを囲む土の部分”を出ては</p>	<p>5.04 『打者』</p> <p>(b) 打者の義務</p> <p>(4) バッターズボックスルール</p> <p>(A) 打者は打撃姿勢をとった後は、次の場合を除き、少なくとも一方の足をバッターズボックス内に置いていなければならない。この場合は、打者はバッターズボックスを離れてもよいが、“ホームプレートを囲む土の部分”を出ては</p>

<p>ならない。</p> <p>(i) 打者が投球に対してバットを振った場合。</p> <p>(ii) 打者が投球を避けてバッタースボックスの外に出ざるを得なかった場合。</p> <p>(iii) いずれかのチームのメンバーが“タイム”を要求し認められた場合。</p> <p>(iv) 守備側のプレーヤーがいずれかの塁で走者に対するプレイを企てた場合。</p> <p>(v) 打者がバントをするふりをした場合。</p> <p>(vi) 暴投または捕逸が発生した場合。</p> <p>(vii) 投手がボールを受け取った後マウンドの土の部分離れた場合。</p> <p>(viii) 捕手が守備のためのシグナルを送るためキャッチャースボックスを離れた場合。</p> <p>打者が意図的にバッタースボックスを離れてプレイを遅らせ、かつ前記(i)～(viii)の例外規定に該当しない場合、《当該試合におけるその打者の最初の違反に対しては球審が警告を与え、その後違反が繰り返されたときにはリーグ会長が然るべき制裁を科す。》</p> <p>「注」我が国では、所属する団体の規定に従う。</p> <p>(b) 打者は、次の目的で“タイム”が宣告されたときは、バッタースボックスおよび“ホームプレート”を囲む土の部分、を離れることができる。</p> <p>(i) プレーヤーの交代</p> <p>(ii) いずれかのチームの協議</p> <p>【原注】審判員は、前の打者が塁に出るかまたはアウトになれば、速やかにバッタースボックスに入るよう次打者に促さなければならない。</p>	<p>ならない。</p> <p>(i) 打者が投球に対してバットを振った場合。</p> <p>(ii) チェックスイングが塁審にリクエストされた場合。</p> <p>(iii) 打者が投球を避けてバランスを崩すか、バッタースボックスの外に出ざるを得なかった場合。</p> <p>(iv) いずれかのチームのメンバーが“タイム”を要求し認められた場合。</p> <p>(v) 守備側のプレーヤーがいずれかの塁で走者に対するプレイを企てた場合。</p> <p>(vi) 打者がバントをするふりをした場合。</p> <p>(vii) 暴投または捕逸が発生した場合。</p> <p>(viii) 投手がボールを受け取った後マウンドの土の部分離れた場合。</p> <p>(ix) 捕手が守備のためのシグナルを送るためキャッチャースボックスを離れた場合。</p> <p>打者が意図的にバッタースボックスを離れてプレイを遅らせ、かつ前記(i)～(viii)の例外規定に該当しない場合、《当該試合におけるその打者の最初の違反に対しては球審が警告を与え、その後違反が繰り返されたときにはリーグ会長が然るべき制裁を科す。》</p> <p>「注」我が国では、所属する団体の規定に従う。</p> <p>(b) 打者は、次の目的で“タイム”が宣告されたときは、バッタースボックスおよび“ホームプレート”を囲む土の部分、を離れることができる。</p> <p>(i) 負傷または負傷の可能性のある場合。</p> <p>(ii) プレーヤーの交代</p> <p>(iii) いずれかのチームの協議</p> <p>【原注】審判員は、前の打者が塁に出るかまたはアウトになれば、速やかにバッタースボックスに入るよう次打者に促さなければならない。</p>
<p>5.06 『走者』</p> <p>(b) 進塁</p> <p>(3) 次の場合、打者を除く各走者は、アウトにされるおそれなく1個の塁が与えられる。</p> <p>(C) 野手が飛球を捕らえた後、ベンチまたはスタンド内に倒れ込んだり、ロープを越えて観衆内(観衆が競技場内まで入っているとき)に倒れ込んだ場合。</p> <p>「原注」野手が正規の捕球をした後、スタンド、観衆、ダッグアウト、またはその他ボールデッドの個所に倒れ込んだり、あるいは捕球した後ダッグアウトの中で倒れた場合、ボールデッドとなり、各走者は野手が倒れ込んだときの占有</p>	<p>5.06 『走者』</p> <p>(b) 進塁</p> <p>(3) 次の場合、打者を除く各走者は、アウトにされるおそれなく1個の塁が与えられる。</p> <p>(C) 野手が飛球を捕らえた後、ボールデッドの個所に踏み込んだり、倒れ込んだ場合。</p> <p>「原注」野手が正規の捕球をした後、ボールデッドの個所に踏み込んだり、倒れ込んだ場合、ボールデッドとなり、各走者は野手がボールデッドの箇所に入ったときの占有塁から1個の進塁が許される。</p>

<p>塁から 1 個の進塁が許される。</p>	
<p>5.07 『投手』</p> <p>(a) 正規の投球姿勢</p> <p>(2) セットアップポジション</p> <p>投手は、打者に面して立ち、軸足を投手板に触れ、他の足を投手板の前方に置き、ボールを両手で身体の前方に保持して、完全に動作を静止したとき、セットポジションをとったとみなされる。</p> <p>この姿勢から、投手は、</p> <p>①打者に投球しても、塁に送球しても、軸足を投手板の後方(後方に限る)に外してもよい。</p> <p>②打者への投球に関連する動作を起こしたならば、途中で止めたり、変更したりしないで、その投球を完了しなければならない。</p> <p>セットポジションをとるに際して“ストレッチ、”として知られている準備動作(ストレッチとは、腕を頭上または身体の前方に伸ばす行為をいう)を行うことができる。しかし、ひとたびストレッチを行なったならば、打者に投球する前に、必ずセットポジションをとらなければならない。</p> <p>投手は、セットポジションをとるに先立って、片方の手を下に下ろして身体の横につけていなければならない。この姿勢から、中断することなく、一連の動作でセットポジションをとらなければならない。</p> <p>投手は、ストレッチに続いて投球する前には (a) ボールを両手で身体の前方に保持し、(b) 完全に静止しなければならない。審判員は、これを厳重に監視しなければならない。投手は、しばしば走者を塁に釘づけにしようと規則破りを企てる。投手が“完全な静止、”を怠った場合には、審判員は、ただちにボークを宣告しなければならない。</p> <p>【原注】走者が塁にいない場合、セットポジションをとった投手は、必ずしも完全静止をする必要はない。</p> <p>しかしながら、投手が打者のすきについて意図的に投球したと審判員が判断すれば、クイックピッチとみなされ、ボールが宣告される。</p> <p>6.02(a)(5)「原注」参照。</p> <p>【注1】我が国では、本項「原注」の前段は適用しない。</p>	<p>5.07 『投手』</p> <p>(a) 正規の投球姿勢</p> <p>(2) セットアップポジション</p> <p>投手は、打者に面して立ち、軸足を投手板に触れ、他の足を投手板の前方に置き、ボールを両手で身体の前方に保持して、完全に動作を静止したとき、セットポジションをとったとみなされる。</p> <p>この姿勢から、投手は、</p> <p>①打者に投球しても、塁に送球しても、軸足を投手板の後方(後方に限る)に外してもよい。</p> <p>②打者への投球に関連する動作を起こしたならば、途中で止めたり、変更したりしないで、その投球を完了しなければならない。</p> <p>セットポジションをとるに際して“ストレッチ、”として知られている準備動作(ストレッチとは、腕を頭上または身体の前方に伸ばす行為をいう)を行うことができる。しかし、ひとたびストレッチを行なったならば、打者に投球する前に、必ずセットポジションをとらなければならない。</p> <p>投手は、セットポジションをとるに先立って、片方の手を下に下ろして身体の横につけていなければならない。この姿勢から、中断することなく、一連の動作でセットポジションをとらなければならない。</p> <p>投手は、ストレッチに続いて投球する前には (a) ボールを両手で身体の前方に保持し、(b) 完全に静止しなければならない。審判員は、これを厳重に監視しなければならない。投手は、しばしば走者を塁に釘づけにしようと規則破りを企てる。投手が“完全な静止、”を怠った場合には、審判員は、ただちにボークを宣告しなければならない。</p> <p>【原注】走者が塁にいない場合、セットポジションをとった投手は、必ずしも完全静止をする必要はない。</p> <p>しかしながら、投手が打者のすきについて意図的に投球したと審判員が判断すれば、クイックピッチとみなされ、ボールが宣告される。</p> <p>6.02(a)(5)「原注」参照。</p> <p>【注1】アマチュア野球では、本項「原注」の前段は適用しない。</p>
<p>5.08 『得点の記録』</p> <p>(b) 正式試合の最終回裏、または延長回の裏、満塁で打者が四球、死球、その他のプレイで一塁を与えられたために走者となったので、三塁走者が本塁に進まねばならなくなり、得点すれば勝利を決する 1 点となる場合には、球審はその</p>	<p>5.08 『得点の記録』</p> <p>(b) 正式試合の最終回裏、または延長回の裏、満塁で打者が四球、死球、その他のプレイで一塁を与えられたために走者となったので、<b>打者とすべての走者が次の塁に進まねばならなくなり、三塁走者が</b>得点すれば勝利を決する 1 点と</p>

<p>走者が本塁に触れるとともに、打者が一塁に触れるまで、試合の終了を宣告してはならない。</p>	<p>なる場合には、球審は<b>三塁</b>走者が本塁に触れるとともに、打者が一塁に触れるまで、試合の終了を宣告してはならない。</p>
<p>5.09 『アウト』  (a) 打者アウト  打者は、次の場合、アウトとなる。  (1) フェア飛球またはファウル飛球(ファウルチップを除く)が、野手に正規に捕らえられた場合。  【原注1】野手は捕球するためにダッグアウトの中に手を差し伸べることはできるが、足を踏み込むことはできない。野手がボールを確捕すれば、それは正規の捕球となる。ダッグアウトまたはボールデッドの個所(たとえばスタンド)に近づいてファウル飛球を捕らえるためには、野手はグラウンド(ダッグアウトの縁を含む)上または上方に片足または両足を置いておかなければならず、またいずれの足もダッグアウトの中またはボールデッドの個所の中に置いてはならない。正規の捕球の後、野手がダッグアウトまたはボールデッドの個所に倒れ込まない限り、ボールインプレイである。走者については5.06(b)(3)(C)[原注]参照。</p>	<p>5.09 『アウト』  (a) 打者アウト  打者は、次の場合、アウトとなる。  (1) フェア飛球またはファウル飛球(ファウルチップを除く)が、野手に正規に捕らえられた場合。  【原注1】野手は捕球するためにダッグアウトの中に手を差し伸べることはできるが、足を踏み込むことはできない。野手がボールを確捕すれば、それは正規の捕球となる。ダッグアウトまたはボールデッドの個所(たとえばスタンド)に近づいてファウル飛球を捕らえるためには、野手はグラウンド(ダッグアウトの縁を含む)上または上方に片足または両足を置いておかなければならず、またいずれの足もダッグアウトの中またはボールデッドの個所の中に置いてはならない。正規の捕球の後、野手がダッグアウトまたはボールデッドの個所に<b>踏み込んだり、倒れ込んだ場合、ボールデッドとなる</b>。走者については5.06(b)(3)(C)[原注]参照。</p>
<p>5.09 『アウト』  (b) 走者アウト  (9) 後位の走者がアウトとなっていない前位の走者に先んじた場合。(後位の走者がアウトとなる。)    【注1】ボールインプレイ中に起きた行為(たとえば、悪送球、ホームランまたは柵外に出たフェアヒットなど)の結果、走者に安全進塁権が認められた場合にも、本項は適用される。  【注2】本項は、走者の位置が入れ代わったとき</p>	<p>5.09 『アウト』  (b) 走者アウト  (9) 後位の走者がアウトとなっていない前位の走者に先んじた場合。(後位の走者がアウトとなる。)  「原注」後位の走者の行動または前位の走者の行動によって、後位の走者は前位の走者に先んじたとみなされる場合がある。  例ー1 アウト走者二・三塁のとき、三塁走者(前位の走者)が本塁へ進塁しようとして三塁本塁間のランダウンプレイとなった。二塁走者(後位の走者)は前位の走者がタッグアウトになると思い、三塁に進んだ。三塁走者は触球されずに、三塁に戻り、左翼方向に塁を踏み越えてしまった。このとき、後位の走者は、前位の走者の行動によって前位の走者に先んじたことになる。結果として、後位の走者はアウトとなり、三塁は占有されていないことになる。前位の走者が三塁を放棄してアウトと宣告されていない限り、前位の走者はアウトになる前に三塁に戻れば三塁を占有する権利がある。5.06(a)(1)参照。  【注1】ボールインプレイ中に起きた行為(たとえば、悪送球、ホームランまたは柵外に出たフェアヒットなど)の結果、走者に安全進塁権が認められた場合にも、本項は適用される。  【注2】本項は、走者の位置が入れ代わったとき</p>

<p>に、後位の走者をアウトにすることを意味し、たとえば、二塁の走者を甲、一塁の走者を乙とすれば、一塁走者乙が二塁走者甲を追い越したときはもちろん、逆走の際など、二塁走者甲が一塁走者乙を追い越す形をとって、本来本塁から遠くにあるべき乙と、近くにあるべき甲との位置が入れ代わった場合でも、常に後位の乙がアウトになることを規定している。</p>	<p>に、後位の走者をアウトにすることを意味し、たとえば、二塁の走者を甲、一塁の走者を乙とすれば、一塁走者乙が二塁走者甲を追い越したときはもちろん、逆走の際など、二塁走者甲が一塁走者乙を追い越す形をとって、本来本塁から遠くにあるべき乙と、近くにあるべき甲との位置が入れ代わった場合でも、常に後位の乙がアウトになることを規定している。</p>
<p>5.09 『アウト』 (c) アピールプレイ (3) 走者が一塁をオーバーランまたはオーバーライドした後、直ちに帰塁しないとき、身体または塁に触球された場合。(5.09b11 参照)</p>	<p>5.09 『アウト』 (c) アピールプレイ (3) 走者が一塁をオーバーランまたはオーバーライドした後、直ちに帰塁しないとき、<b>一塁に帰塁する前に</b>身体または塁にタッグされた場合。(5.09b11 参照)</p>
<p>5.12 『"タイム"の宣告』 (b) 審判員が"タイム"を宣告すれば、ボールデッドとなる。 次の場合、球審は"タイム"を宣告しなければならない。 (6) 野手が飛球を捕らえた後、ベンチ、またはスタンド内に倒れ込んだり、ロープを越えて観衆内(観衆が競技場内まで入っているとき)に倒れ込んだ場合。走者に関しては5.06(b)(3)(c)の規定が適用される。 野手が捕球後ベンチに踏み込んで、倒れ込まなかったときは、ボールインプレイであるから、各走者はアウトを賭して進塁することができる。</p>	<p>5.12 『"タイム"の宣告』 (b) 審判員が"タイム"を宣告すれば、ボールデッドとなる。 次の場合、球審は"タイム"を宣告しなければならない。 (6) 野手が飛球を捕らえた後、<b>ボールデッドの個所に踏み込んだり、倒れ込んだ場合。各走者は、アウトにされるおそれなく、野手がボールデッドの個所に入ったときの占有塁から1個の進塁が許される。</b></p>
<p>6.01 『妨害・オブストラクション・本塁での衝突プレイ』 (a) 打者または走者の妨害 次の場合は、打者または走者によるインターフェアとする。 (1) 第3ストライクの後、打者走者が投球を処理しようとしている捕手を明らかに妨げた場合。 打者走者はアウトになり、ボールデッドとなって、他の走者は投手の投球当時占有していた塁に戻る。</p>	<p>6.01 『妨害・オブストラクション・本塁での衝突プレイ』 (a) 打者または走者の妨害 次の場合は、打者または走者によるインターフェアとする。 (1) <b>捕手に捕球されていない</b>第3ストライクの後、打者走者が投球を処理しようとしている捕手を明らかに妨げた場合。 打者走者はアウトになり、ボールデッドとなって、他の走者は投手の投球当時占有していた塁に戻る。</p>
<p>6.01 『妨害・オブストラクション・本塁での衝突プレイ』</p>	<p>(j) <b>併殺を試みる塁へのスライディング</b> 走者が併殺を成立させないために、<b>"正しいスライディング"をせずに、野手に接触したり、接触しようとする</b>れば、本条によりインターフェアとなる。 (1) <b>ベースに到達する前からスライディングを始め(先に地面に触れる)、</b> (2) <b>手や足でベースに到達しようとし、</b> (3) <b>スライディング終了後は(本塁を除き)ベー</b></p>

	<p>ス上にとどまろうとし、</p> <p>(4) 野手に接触しようとして走路を変更することなく、ベースに達するように滑り込む。</p> <p>“正しいスライディング”をした走者は、そのスライディングで野手に接触したとしても、本条によりインターフェアとはならない。また、走者の正規の走路に野手が入ってきたために、走者が野手に接触したとしてもインターフェアとはならない。</p> <p>前記にかかわらず、走者がロールブロックをしたり、意図的に野手の膝や送球する腕、上半身より高く足を上げて野手に接触したり、接触しようとするれば、“正しいスライディング”とはならない。</p> <p>走者が本項に違反したと審判員が判断した場合、走者と打者走者にアウトを宣告する。その走者がすでにアウトになっている場合については、守備側がプレイを試みようとしている走者にアウトが宣告される。</p> <p>【注】我が国では、所属する団体の規定に従う。</p>
<p>6.03 『打者の反則行為』</p> <p>(a) 打者の反則行為によるアウト</p> <p>次の場合、打者は反則行為でアウトになる。</p> <p>(4) 打者が、いかなる方法であろうともボールの飛距離を伸ばしたり、異常な反発力を生じさせるように改造、加工したと審判員が判断するバットを使用したり、使用しようとした場合。</p> <p>このようなバットには、詰め物をしたり、表面を平らにしたり、釘を打ち付けたり、中をうつろにしたり、溝を付けたり、パラフィン、ワックスなどでおおって、ボールの飛距離を伸ばしたり、異常な反発力を生じさせるようにしたものが含まれる。</p> <p>打者がこのようなバットを使用したために起きた進塁は認められない《(バットの使用に起因しない進塁、たとえば盗塁、ボーク、暴投、捕逸を除く)》が、アウトは認められる。</p> <p>打者はアウトを宣告され、試合から除かれ、後日リーグ会長によってペナルティが科される。</p>	<p>6.03 『打者の反則行為』</p> <p>(a) 打者の反則行為によるアウト</p> <p>次の場合、打者は反則行為でアウトになる。</p> <p>(4) 走者がいるとき、または投球が第3ストライクするとき、打者がフェア地域またはファウル地域にバットを投げて、投球を受けようとしていた捕手(またはミット)に当たった場合。</p> <p>(5) 打者が、いかなる方法であろうともボールの飛距離を伸ばしたり、異常な反発力を生じさせるように改造、加工したと審判員が判断するバットを使用したり、使用しようとした場合。</p> <p>このようなバットには、詰め物をしたり、表面を平らにしたり、釘を打ち付けたり、中をうつろにしたり、溝を付けたり、パラフィン、ワックスなどでおおって、ボールの飛距離を伸ばしたり、異常な反発力を生じさせるようにしたものが含まれる。</p> <p>打者がこのようなバットを使用したために起きた進塁は認められない《(バットの使用に起因しない進塁、たとえば盗塁、ボーク、暴投、捕逸を除く)》が、アウトは認められる。</p> <p>打者はアウトを宣告され、試合から除かれ、後日リーグ会長によってペナルティが科される。</p>
<p>定義 76 『TAG「タッグ」(触球)』</p> <p>野手が、手またはグラブに確実にボールを保持して、その身体を塁に触れる行為、あるいは確実に保持したボールを走者に触れるか、手またはグラブに確実にボールを保持して、その手またはグラブを走者に触れる行為をいう。</p> <p>しかし、塁または走者に触れると同時に、あるいは</p>	<p>定義 76 『TAG「タッグ」(触球)』</p> <p>野手が、手またはグラブに確実にボールを保持して、その身体を塁に触れる行為、あるいは確実に保持したボールを走者に触れるか、手またはグラブに確実にボールを保持して、その手またはグラブ(ひもだけの場合は含まない)を走者に触れる行為をいう。</p>

<p>はその直後に、ボールを落とした場合は、「触球」ではない。</p> <p>野手が塁または走者に触れた後、これに続く送球動作に移ってからボールを落とした場合は、「触球」と判定される。</p> <p>要するに、野手が塁または走者に触れた後、ボールを確実につかんでいたことが明らかであれば、これを落とした場合でも、「触球」と判定される。</p>	<p>しかし、塁または走者に触れると同時に、あるいはその直後に、ボールを落とした場合は、「触球」ではない。</p> <p>野手が塁または走者に触れた後、これに続く送球動作に移ってからボールを落とした場合は、「触球」と判定される。</p> <p>要するに、野手が塁または走者に触れた後、ボールを確実につかんでいたことが明らかであれば、これを落とした場合でも、「触球」と判定される。</p>
<p>定義 80 『TOUCH 「タッチ」』</p> <p>プレーヤーまたは審判員の身体はもちろん、その着衣あるいは用具のどの部分に触れても、「プレーヤーまたは審判員に触れた」ことになる。</p>	<p>定義 80 『TOUCH 「タッチ」』</p> <p>プレーヤーまたは審判員の身体はもちろん、<b>着用しているユニフォーム</b>あるいは用具のどの部分に触れても、「プレーヤーまたは審判員に触れた」ことになる。</p>